

第3回土橋自然観察教育林連絡協議会議事録

期 日:平成25年9月13日(金)19時00分~21時15分

場 所:厚沢部町図書館視聴覚室

参加者:石井淳平・水本絵夢(教育委員会事務局)、協議会員4名

議事要点

樹名板の解説文について

- (1)木材としての用途を鈴木憲昭氏に確認
- (2)自生、外来のマークをつける
- (3)解説文の専門用語はそのまま解説冊子をつくる
- (4)一行解説がつく

1. 樹名板の解説文について

水本:解説文のところを確認していただき、不足の点があれば指摘いただきたい。樹名板の見本を確認して欲しい。展示館に近い見本林(第一見本林)は手作りの樹名板とし、ここでお見せしたアルミ複合板の樹名板は第2見本林で使用したい。

会員A:鮫島先生は、せっかく樹名板をつくるなら厚沢部町の地元ならではの情報を入れたらどうかと言われた。たとえば、ブナは木材としては活用する方法がない樹木だが、用途によって活用できるようになってきた。厚沢部に縁がある木とない木があるが、できれば地元に縁のある樹木には説明を付けたい。

会員B:米谷林蔵さんから聞き取りした事柄が『厚沢部の森に学ぶ』に掲載されている。

会員A:属名は学名を必要とする人には不要なものなので削れるのではないかと、との意見を愛知教育大学の渡辺先生からいただいた。葉っぱと花と実の情報がほしいとおっしゃっていた。

会員B:属名と科名は属名のほうが上位の分類か。

水本:科名が上位の分類となる。

水本:樹皮の情報は必要か。

会員A:樹木によって特徴的ならば必要なのではないか。

会員B:ほしい情報は葉っぱの情報なので、いつ行っても葉っぱが見られることが望ましい。

会員A:例えばゴヨウマツなら葉っぱが5枚あるということが図でわかればよい。

水本:鋸歯のような専門用語はどうするか。

石井:できればもう少しわかりやすい単語に置き換えたらどうか。

会員A:後に冊子をつくったときに語句の説明を入れたらよいのではないか。

会員B:先と鋸歯と付け根が主な分類基準となる。最低限度の専門用語は必要ではないか。

石井:小学生にはハードルが高すぎるのではないか。「球果の鱗片」のような表現を理解することは困難だ。

会員B:言い換えられる用語はドングリとか松ぼっくりのように言い換えて、括弧書きで専門用語を示したらどうか。どのくらいの年齢を対象とするのか。

石井:博物館の展示などでは、小学校4年生程度が理解できるようにキャプション等を工夫することが一般的に行われている。

会員B:冒頭の一行だけを小学生向けにして、残りは多少難しめにしてはどうか。冒頭の一行はキャッチコピー的にわかりやすく、興味を引くような内容とし、その後に詳しい説明を続けてはどうか。また、樹名板に後から情報を付加できるようにしておけたらよい。裏にラミネートした葉っぱを貼れるようにできたらよい。必ず後で付け加えたい情報が出てくる。

会員A:後で付け加える情報のことや小学生向けの一文が入ること考えると、情報量を少し減らさないといけな

い。

会員 B: 材の利用の仕方として、マタギの利用方法とアイヌの利用方法の違い、身近なものに使われる利用方法などがわかると良い。。

会員 A: サワグルミが見本林のすぐ裏にある「椰子の木神社」の語源であることなども触れて良いのではないか。

会員 B: 雌雄ある木はどうするか。

水本: ヨートネリコ、オルトネリコが何を指すのかわからない。

会員 A: 厚沢部にある木とない木を区分したらどうか。

石井: 前回の議論では、自生していない木にそれとわかるようなマークしてはどうかということで話が終わっていた。

会員 C: クロマツは厚沢部の町木になっているが、自生種なのか。

会員 B: クロマツもアカマツも本州北部が北限となっているので、移入種だと思う。

会員 A: 広葉樹は自生が多い。

水本: 自生、外来、植林の 3 種区分でどうか。

会員 B: 移入と自生で分けることが図鑑では一般的ではないかと思う。

水本: 特筆すべき移入先はすでに記入されている。マークで移入と自生を区別することとする。

会員 A: 56 のヒノキが「優秀な建築材」という表現はどうだろうか？

会員 B: 52 のバッコヤナギが「ヤナギの仲間では最も大木になる」と書いているが、オオバヤナギが最も大きいと書かれている書籍もある。また、ネムノキはマメ科ではないか。

水本: マメ科だ。

会員 B: 58 のブナはここだけ冬芽が書かれているのは特徴的だからか。ヨーロッパではオークと並んで森の中心的な存在。

会員 D: ブナについては果実の話に触れてはどうか。クマの餌になるということも含めて重要ではないか。

会員 A: 蕎麦の実に似たような形などのような表現でも良いのではないか。

会員 C: アスナロとヒノキは別の植物なので、ヒノキアスナロという名称は最初は違和感があった。

会員 B: ヒノキアスナロは古生代に形成された松前層に分布する。京都大学の河野昭一先生は、氷河期以前にヒノキアスナロは北海道に分布していたと述べていた。北海道から本州へ分布を広げたのではないかと推測されている。DNA 分析の成果を利用した研究論文などもあるようだ。

会員 B: トチ餅を食べる習慣はこのあたりにはないのか。

会員 A: 東北地方や長野県あたりの習慣だと思う。樹木の用途については私が調べてくる。

会員 B: トチノキは世界の四大街路樹であるマロニエ。

会員 D: マロニエはセイヨウトチノキ。

会員 A: ナナカマドは農機具の柄に使われている。

水本: 用途と用いられる理由についても明らかになると助かる。

会員 A: できるだけ調べておく。

会員 B: ハルニレを見分けるときに、若い枝のひび割れを確認するが、そのような情報は必要ではないか。林業試験場の長坂さんがオヒョウニレとハルニレを見分ける方法を教えてくれた。切れ目がある方がハルニレだったか。

水本: ドロノキはパルプの原材料として注目されている。

会員 A: キリノキはどこまで自生しているのか。

会員 C: 江差の実家では植林していたが。

その他

会員 B: 今年度の進捗状況について説明して欲しい。(1)希少植物のモニタリング調査の状況と評価方法について。(2)河畔林の植林について、檜山振興局の方々と住民と、我々の間でギャップがある。川に生えた樹木

が日陰をつくるというだけではなく、桂のような人の手を入れて大きく育てる樹木が必要。天端のところに植えることが必要。河畔林の植林については、改修工事の中で檜山振興局が行うと思っていたが、いつのまにか立ち消えになった。川をどの程度まで復元するかがみえない。(3)ヒバの植樹地をどのようにするか、現在の進捗状況を教えて欲しい。(4)トドマツ母樹林管理簿がないことについて、町になぜ引き継がれなかったのか。

(1)希少植物のモニタリング調査と評価

水本：今年度分はすでに調査を終えている。今年で3年目であることから、変動を理解するだけの資料とはなっていない。調査は今後も継続する。個体数が減っているようなら人口受粉的なことも検討しても良いのではないか、ということ京都大学の末次健司さんから助言いただいた。今年は笹に押しつぶされそうな箇所には生育している植物の周辺で、笹を簡単に刈り払って保護したケースがある。

(2)河畔林の植樹

水本：8月の定例観察会で約20本の植樹を行った。川岸の天端のところに植えた。

(3)ヒバの植樹地

水本：地形測量を完了。今後は林床植生の調査と母樹の毎木調査、植樹木のサンプル調査などを行う。

(4)母樹の管理台帳

石井：厚沢部町役場内に保管されていないことは今年度の調査で確認済み。森林管理署に確認する。